

## P-001

## 妊婦の座位行動が妊娠や児に及ぼす影響に関する文献検討

柴田由里子<sup>1)</sup><sup>1)</sup>獨協医科大学 看護学部、<sup>2)</sup>筑波大学大学院 人間総合科学研究群 スポーツ医学学位プログラム 博士課程

【目的】長時間の座位行動は、健康指標に様々な悪影響を及ぼす。本研究では、妊婦の座位行動が妊娠経過や児に及ぼす影響と関連性について、文献検討により明らかにする。

【方法】PubMedを用いて、キーワード「Pregnant」「Sedentary」「Fetus」「Newborn」で2024年12月までを検索し、122件が抽出された。原著論文で、妊娠期の座位行動が妊娠や児の健康に及ぼす影響が述べられた11文献を対象とした。

【結果】文献11件のうち3件（アメリカ2件、ヨーロッパ9か国）は、妊娠により座位行動の増加を示した。4件の文献（アメリカ2件、ヨーロッパ9か国1件、スウェーデン1件）では、妊婦の座位行動増加と児の出生体重に関連はなかったと報告している。妊婦の座位行動の増加が妊娠や児に与えた影響では、早期破水の増加（エジプト）、妊娠期間の短縮（アメリカ）、早産やNICU入院のリスク増加（スウェーデン）、新生児の頭囲と身長が大きく体格指数が低い（アメリカ）、新生児の低血糖リスクが5倍（ブラジル）などの結果を明らかにしていた。また、座位時間が長いと、妊婦の健康状態の自覚が良くない（スウェーデン）、肥満妊婦の場合は胎盤の絨毛密度が高い（ヨーロッパ9か国）、分娩中の胎児アシドーシスの増加（スペイン）、男児の胎盤HO-1 mRNA発現の増加、女児では臍帯血Cペプチドの低下（ヨーロッパ9か国）と関連していた。一方で、妊婦の座位時間が減少すると、臍帯血レプチンの減少が促進された（ヨーロッパ9か国）。

【考察】妊婦の座位行動の増加は先行研究でも明らかになっている。これは、つわりや腹部増大の身体的変化、苦痛/不快症状の自覚、余暇時間の増加によるスクリーンタイムの増加、周囲の配慮による座位の勧めなどが関連していると考えられる。妊婦の座位行動の増加や長時間の座位は、早期破水や早産、新生児の体格など、妊娠期間や身体測定値との関連が示された。また、解剖生理学的観点から、臍帯血レプチンやCペプチド、新生児の血糖値、胎児アシドーシス、胎盤絨毛密度などにも影響を与えていた。このことから、妊婦の座位行動や座位時間の増加は、妊婦だけでなく、母体環境で発育する胎児に直接的影響を与え、未熟な状態で胎外生活が開始されるリスクが高まり、新生児の健康に直接的な影響を与えている可能性が考えられた。したがって、児の健やかな成長・発育のためには、妊婦の座位行動の是正は喫緊の課題であると考えられる。

## P-002

## 当院で経験した分娩施設外で分娩に至った10例の検討

宮林 寛<sup>1,2)</sup>、久保田悠里<sup>1)</sup>、向井 千尋<sup>1)</sup>、中ノ森 綾<sup>1)</sup>、原 康一郎<sup>1)</sup>、斉藤 勝也<sup>1,2)</sup>、杉本 沙耶<sup>2)</sup>、宇田川真季<sup>2)</sup><sup>1)</sup>春日部市立医療センター 小児科、<sup>2)</sup>春日部市立医療センター CPT委員会

【目的】春日部市立医療センターは地域周産期母子医療センターとして埼玉県東部北地域を担当している。当院で経験した分娩施設外で分娩に至った症例を検討した。

【方法】2024年12月までに当院で対応した、分娩施設外で出生した母児の背景等と児の転帰を診療録から後方視的に検討した。

【結果】分娩施設外で分娩した母親は10人、年齢27.6±8.0歳（平均±標準偏差：以下同）、20歳未満2人、分娩時未婚は6人、初産婦6人、妊健未受診7人であった。

経産婦の4人は、経産4.3±2.5回と多産が多い傾向であった。若年の初産婦と、多産婦の2つの集団が認められた。妊健未受診の理由としては、妊娠未自覚（自称）5人、経済的困難1人、相談者なし2人（重複あり）であった。妊健未受診かつ未婚は4人であった。分娩場所は自宅が6人、救急車内が4人であった。Dubowitz法などの推定を含む胎週数は、36±3週、入院時体重は2620±700g、男女比6：4、入院日齢は9人が日齢0で、1人は日齢2で入院した。日齢2（母談）で入院となった児は、自宅分娩後2日間放置された後の入院であった。

入院時体温36.2±0.7℃（1人計測感度以下）であった。

1人は重症仮死のため高次医療機関へ転院となった。人工換気2人、ハイフロー酸素投与2人、瀉血療法を1人に施行した。皮膚培養から有意な菌が検出されたのは3人（大腸菌1人、黄色ブドウ球菌2人、表皮ブドウ球菌1人：重複あり）であった。

当院から退院した9人は平均日齢23±19日で軽快退院した。退院先は自宅が6人、児童相談所預かりが3人であった。転院した1人は日齢47に自宅へ退院となった。

【結語】分娩施設外で分娩に至った症例を検討した。ハイリスクな母親の因子としては、若年の未婚初産婦と、多経産婦が考えられた。地域での母子医療安全に重要な情報が得られた。